

年間第十六主日（主日の福音を中心とする「霊的な読書」）

（一）聖書朗読：マタイ 13：24-43

イエスは天の国についてのたとえを言われた：ある人が良い種を畑に蒔いた。しかし、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。これは人の子が世の中に良い種を蒔いて、悪魔が御国の子らにいたということである。主人は両方の麦とも育つままにして、刈り入れる時、毒麦としての不法を行う者が火で焼かれて、正しい人を集める。そのほかに、天の国はかしらの種に似ている。それはどんな種よりも小さいのに、成長すると、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの大きな木になる。また、天の国は、パンの種に似ている。それは、サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。

（二）カテキズムの響き：カトリック教会のカテキズムの番号 #309-312、827； YOUCAT #49、51、111、163

世の終わりが来るまでは、すべての人の中で、罪の毒麦が福音のよい種に混じっています。だから、教会は罪人を集めているのです。この罪人たちはキリストに救われていますが、常に聖化の途上にあるのです。聖なる教会であるので、自分のふところに罪人を抱いていて、常に清められるべきものであり、悔い改めと刷新との努力をたえず続けるのです。教会の成員は、聖職者も含めて皆、罪人であることを認めなければなりません。

聖なる教会は、全能の父であり、秩序あるよい世界の創造主である神が全被造物を配慮しておられることを確信します。悪の存在と問題に対して答えるのは、キリスト教の教えの全体です。神は無限の英知と善とをもって、世界を究極の目的「向かう途上」のものとして創造することを自由にお望みになりました。神の計画によって、この生成には、より完全なものがあればより、不完全なものも存在し、自然的な形成もあれば、破壊もあることになっています。従って、物理的善と物理的悪とが共存するのです。しかし、道徳的善であるか、悪であるかは、理性的で自由意志を備えている被造物である天使と人間が、自由に選択し愛を優先させることによって決められます。かれらは、究極目的に向かって進める時、罪を犯したので、道徳的悪が世界に入りました。即ち、神は直接にも、間接にも、いかなる意味においても、道徳的悪の原因ではありません。実は、神は被造物の自由を尊重して、道徳的悪を妨げませんが、そこから善を引き出すことがおできになるのです。被造物はよい者であり、罪は悲劇的な出来事です。神は忍耐強い愛から、契約の通りに、贖いをもたらす御子の受肉、聖霊の恩恵、教会の創立、秘跡の力によって人間と出会い、至福ないのちへ人々をお招きになります。そして、自由意志を持つ被造物が、これに同意しながら、パンの種として、世界を善と愛の完全に導き続けることができます。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号 #57-58、73）

人々の罪と救い主の贖いという神秘：

人間の歴史には罪が存在します。このような現実はただ神の啓示の光、特にすべての人の救い主であるキリストの光によってのみ、全面的に明らかになります。信仰によって、悪そのものから善を引き出すことができないとすれば、神は悪の存在を許されなかったということを確認します。神はキリストの死と復活によって、人々の罪であり他の諸悪の根源とあの大きな道徳の悪に打ち勝たれました。また、キリストの栄光と私たちの贖いという最大の善を引き出されたのです。

最後の祈り：世界の災害、種々の迫害、人間の弱さと罪悪のために、共同祈願を捧げます。後、主の祈りをもって、祈りを終えます。